

大森銀山重要伝統的建造物群保存地区（全体）

大森町は 1600 年代前半から、石見銀山の行政と商業のハブ地として機能してきました。1603 年までにライバルの武将たちのほとんどを征服し、1867 年まで日本を支配することとなる幕府を打ち立てた徳川家が、この銀山の麓に現地での実務を担当する行政官のための奉行所を設立した頃のことです。奉行所の商品やサービスに対する需要を満たすために商人や侍が移住してきたことで、周りに町が誕生しました。これがさらなる雇用の機会を生み、町の人口は増え続けました。

多様な街の景観

大森町は比較的狭いエリアで急激に発達した結果、侍や商人、一般人の家、そして寺社が密集して混ざり合い、奇妙に入り交じった都市構造になりました。これは、社会階級ごとに隣接する別のエリアに住むのが常だった封建時代の日本には珍しいことでした。町の大部分は 1800 年の火事で破壊されてしまいましたが、このパッチワークのような土地の分布は他とは違う大森の特徴として残っています。町の中を歩けば、ほとんどの店や長屋が大通りに面しているのに対し、昔の武家屋敷には家屋と道路の間に庭があるのを目にするでしょう。江戸時代（1603～1867）、庭は地位の象徴でしたが、実用的な目的でも使われていました。中には、庭の中に小さな建物を建てて貸し出し、収入の足しにしていた家もありました。

赤瓦と梅の木

大森は町の中の多くの屋根で使われている赤瓦でも有名です。この地域で見つかった鉄分の豊富な粘度で作られるそれらの石州瓦（石州は石見地域の別名）は、島根県のある中国地方のいたる所で一般的に使われています。高い場所から町を見渡せば、比較的大きな建物の多くの屋根が灰色なのに気づくでしょう。そのような建物はたいてい、伝統的な武家屋敷か行政施設です。灰色の瓦は権威の象徴として、武士階級に好まれていました。町の景観のもう一つの特徴は、梅の木です。その多くは、銀山がまだ活発だったころに植えられました。坑夫たちは梅干しの中のクエン酸が、ほこりっぽい坑道の中で意識を清明に保つ効果があると信じていました。そのため彼らは坑道に入る時、マスクの中にその果実を挟んでいたのです。

現代の大森を訪れる

大森町は歴史地区に指定され、開発から守られていますが、古い建物の一部は革新的な用途で使われてきました。その良い例が、改装された江戸時代の農家の中にある、売店・カフェ・ギャラリーの群言堂です。ここでは衣類や地元の食べ物を購入したり、手工芸品を見たり、座って庭を眺めながらランチや軽食を食べることができます。

大森は住民のプライバシーと生活を尊重する限り、喜んで訪問者を迎えてくれる歴史ある

町です。家の敷地内に入ったり、許可なく住民の写真を撮ったりするのはおやめください。